

# YAVU～関係を耕す養父づくり～

関西大学・政策創造学部 岡本ゼミ（担当教員 岡本哲和）

参加者：有川龍之介・一井菜央・乾莉緒・上野蓮太郎・小島悠誠・竹田朝香・中川真那・中村咲彩・永田夕貴・福井翔也・文野颯太・増澤萌咲・三浦大和・森田大賀・今村天翔・服部修平・原田奏士朗・廣瀬諒也・光田昌平・宮元優人

## 梗概

本報告は、兵庫県養父市の中山間地域における持続可能な地域振興を目指し、「関係人口」を媒介とした共創型地域政策の可能性を探る。養父市は自然豊かな地理的条件と有機農業などの地域資源を有する一方、少子高齢化や人口流出、農業の担い手不足など、典型的な中山間地域の課題を抱えている。本報告では、これらの課題を克服し、地域と都市部を結ぶ新たな関係を構築するための政策プランとして「YAVU (Yabu・Agriculture・Vegetable・Update)」を提案する。

YAVUは、農業を軸に地域外の多様な主体が養父市と継続的に関わる仕組みである。短期的施策としては、「養父市＝有機野菜」というブランドを強化し、農家レストランやECサイト、地域イベント（YAP）などを通じて地域の認知度と消費を拡大する。中期的施策としては、オンラインセミナーと現地での農業体験プログラムを組み合わせ、農業未経験者にも段階的な参加機会を提供することで、関係人口の拡大と就農意欲の醸成を図る。

さらに、短期・中期施策の相乗効果として、SNS投稿キャンペーンや参加特典によるインセンティブ設計を行い、参加者の継続的関与を促すとともに、地域ブランドの認知拡大と経済波及効果の持続を可能にする。これにより、関係人口が地域経済・社会の担い手として機能し、農業を核とした地域発展が促されると期待される。

YAVUにより、養父市が「外に開かれた挑戦の場」となり、長期的に人口減少社会においても選ばれ続ける中山間地域となることを本報告は目指している。

## 1. 本報告の目的

本報告は、「未来を紡ぐ 市民・地域・公共がともに挑戦するまちづくり ～選ばれる中山間地を目指して～」というコンペのテーマを体現するために、地域外の人々との多様な関係を促進して関係人口を増加させ、地域の持続的な活性化を実現する案を提示する。養父市は、自然豊かな中山間地域という地理的特性と、有機農業・農業体験といった地域資源を有しているが、少子高齢化・人口流出・担い手不足などの課題を抱えており、地域経済の停滞や集落機能の低下が懸念されている。

こうした状況に対し、本報告は、YAVU＝Yabu（養父市）、Agriculture（農業）、Vegetable（野菜）、Update（アップデート）と名付けたプランを提案し、都市部住民や企業、教育機関など地域外の人々が養父市内で農作業体験、地域イベント、交流、有機野菜ブランドの発信、体験等を通じて、継続的に地域と関わる「関係人口」の拡大を目指す。これにより、地域資源の活用や、それによる新たな人材・知識の流入を促進し、地域経済の循環を生み出すとともに、(1) 養父市を「選ばれる中山間地」として再構築すること、(2) 都市部住民・関係人口との接点を増やし、地域を訪れる、関わる、参画するという流れを確立すること、を目指す。最終的には「関係人口」の増加が定住・移住・地域での事業参画など次のステップへ波及し、養父市が中山間地帯として魅力・活力

を持ち続ける「選ばれる」地域になることを目指す。

## 2. 本報告の背景

養父市は、自然豊かな中間山地域に位置し、農業が盛んである。特に、環境に配慮した有機農業を地域ブランドの柱としている。またスキー場や「あけのべ自然学校」などの多様な交流資源なども有している。しかしながら、少子高齢化、人口流出、若者の減少による担い手不足などの課題を抱えている。特に地域経済の基盤である農業分野における担い手不足は、地域経済の停滞や耕作放棄地の増加、集落機能の低下が懸念されている。図1から、養父市の人口は2000年の約3万人から現在約2.2万人になり、25年後の2050年には約1.1万人まで減少すること、及び15歳から64歳までの生産年齢人口の割合が減少し65歳以上の老年人口の割合が増加していることで少子高齢化が進行していることがわかる。

養父市の人口推移



図1；養父市の人口推移。出典：総務省 HP より

特に農業分野に関しては、総農家数が1995年から2020年までの25年間で約3,641戸から約1,983戸となっており、約45%減少している。耕地面積に関しても同様に減少しており、1995年の約1,848haから2020年には1,490haとなっている(表1参照)。このように養父市では、少子高齢化に伴う人口減少が進行しており、これに伴う担い手不足が、農業従事者数および耕地面積の減少という形で、深刻な農業課題となっている。

表1：養父市における農家数と耕地面積の推移

年度	総農家数	耕地面積
1995年	約3,641戸	約1,848ha
2015年	約2,397戸	約1,520ha
2020年	約1,983戸	約1,490ha

出典：養父市ウェブサイト等を基に報告者作成。

### 3. YAVU について

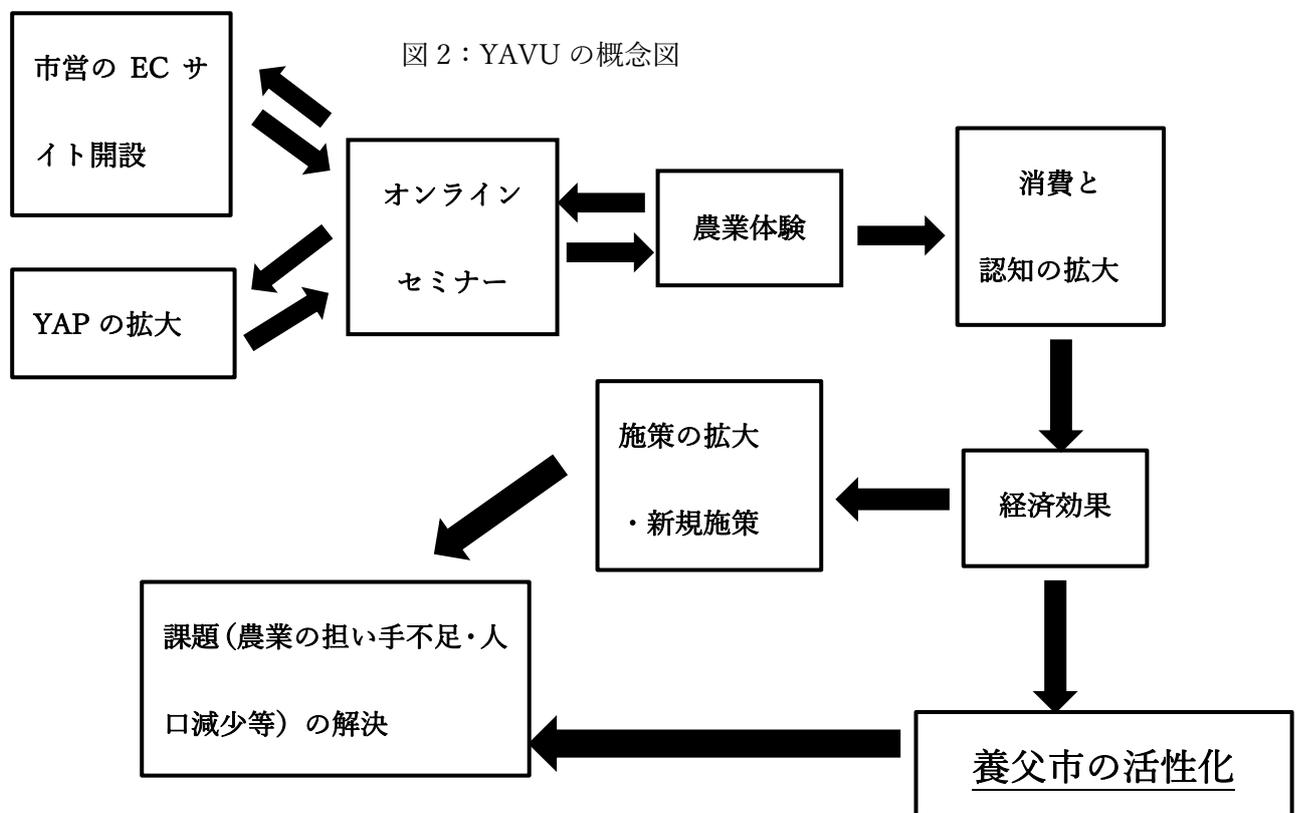
#### 3.1 短期的な施策とその効果

前章を踏まえて、われわれは農業を核にして関係人口の拡大を図るためのプランである YAVU を提案する(図 2 参照)。それは大きく(a)短期的な施策 (b)中期的な施策の 2 つからなる。

まず、短期的な施策について説明する。これは、「養父市といえば有機野菜」というイメージが浸透していることを基盤として農家レストランへの集客を増加させ、さらにそれを中期的な施策へとつなげることを目的としている。それゆえ、養父市と人々の関係を一度限りに終わらせずに、中期的な関係を築くための施策と位置づけられる。

#### 3.2 中期的な施策とその効果

続いて、中期的な中期的な施策について提案する。本施策は、地域外の人々が養父市と継続的に関わるきっかけを作り出し、地域の担い手不足の補完と将来的な定住・就農への繋がり創出



を目的とするものである。以下では、具体的な施策の内容について説明する。

第 1 の施策は、「農業体験に関するオンラインセミナーの開催」である。これは、農業に関心を持つ若者層を主要ターゲットとし、オンラインでの知識提供を行う。この施策の背景として、現代の若者世代は、農業に対して興味はあるが、農業を体験したことのある人が少ないことにある。そこで、農業に関心を持つ農業未経験者に対して、就農への心理的な障壁を取り除き、具体的な行動への一步を踏み出すきっかけを提供する。開催形式はオンライン (Zoom 等) 形式をとり、興味的大小に関わらず気軽に参加できる場を設ける。

開催時期は第 2 の施策である現地体験 (後述) の約 1 か月前から 4 週間前、頻度は週 1 回である。オンライン形式であるため。学生だけでなく社会人も比較的気軽に参加できる。セミナー担

当講師は、養父市で活躍する現役農家の方であり、1回で約1時間半話していただく。毎回異なる内容を提供し、それぞれの分野に特化した講師の登壇を予定している。具体的には、農業の現実的な側面（耕起から出荷までの作業の流れ、機械・農具の使い方やコスト、農家の1日のスケジュール、季節・天候による作業の違い、地域の独自の取り組み、農業のやりがいなど）を中心的な内容として提供する。また、SNS等を通じて講師と受講者とのコミュニケーションを促し、質問等ができるようにする。講師の農家の方への謝礼については、行政や地元経済界などの協力を得て、積極的に行う。

第2の施策は、「季節に合わせた養父市での農業体験の開催」である。ここでは、上記のオンラインセミナーで得た知識を、実際の体験へと応用する。それを通じて、養父市の豊かな自然と「農のリアル」を体感してもらう。このように、オンラインとオフラインの施策を組み合わせた二段階のアプローチで参加者の関心を強化・定着させることが狙いである。

施策の内容としては、養父市の特産物（朝倉山椒、轟大根、富有柿、ほうれん草など）の収穫など人手を要する作業が中心となる。季節ごとに、2泊3日のプログラムを実施する。現地での宿泊に関しては、「あけのべ自然学校」や周辺ホテル（1泊12,000円～16,000円程度）の利用が可能である。移動手段としては、地元のバスも利用してもらう。参加者には、サイズ規格に合わなかった収穫物の試食などの特典を付与し、そこで地域住民との交流も深める。

次に、プログラムの具体的な例（農作状況によって多少変更あり）を示す（表2参照）。春は朝倉山椒の収穫である。大型機械導入が難しく短期間の集中的な人手が必要である一方で、山椒には棘がなく比較的 안전한ため、未経験者でも取り組みやすい。夏は轟大根の間引きである。農業初心者にも栽培しやすく、販売先も確保されているため経営安定性に優れ、品質管理の基礎も学べる。秋は富有柿の収穫である。イベントとしても馴染み深く、作業が簡単で初心者でも対応可能である。そして、冬はほうれん草の収穫である。有機農業が中心であるため、その手法を学ぶことができる。これについては、就農希望者向け体験を実施した前例もある。

これらの施策から期待される効果として、農業関係人口の増加と就農意欲の向上がある。オンラインセミナーで農業を現実的な選択肢として捉える若者が増加し、現地体験を通じて就農意欲が飛躍的に向上する。継続的な参加者の中から、養父市への移住や就農といった具体的な事例の創出が期待される。また、地域がYAVUに取り組むことで、地域コミュニティの確立と養父市のブランド力の強化も考えられる。農業を核として、地域住民と関係人口との間に強固なコミュニティが形成され、互いに学び合う関係が構築される。また、ZOOMやSNSの活用により、養父市の特産物が広く認知され、全国的にも地域ブランド力と養父市の認知度が向上する。

表2：農業体験プログラムの内容とその選択理由

季節	体験内容	選択理由
春	<u>朝倉山椒の収穫</u>	短期的かつ集中的な人手が必要。大型機械の導入が困難。
夏	<u>轟大根の間引き</u>	栽培しやすく、販売先も確保されているため、就農を考える農業初心者に推奨。
秋	<u>富有柿の収穫</u>	イベントとしても馴染み深く、作業が簡単で年齢問わず、初心者でも対応可能。
冬	<u>ほうれん草の収穫</u>	有機野菜として有名。有機農業の手法を学ぶことができる。就農希望者向け体験の前例もある。

出典：報告者が作成。

### 3.3 短期的施策と中期的な施策のつながりが生む相乗効果

これまで、YAVUの短期的施策と中期的施策について説明してきた。しかし、この2つの施策は別々のものでなく、両者が組み合わせることで相乗効果が生まれる。ここでは両施策の2つの「つながり」について説明する。

#### ①参加者へのインセンティブを生むつながり

第1は、両施策のつながりを通じて、参加(者)へのインセンティブが生み出されることである。YAVUでは、SNS投稿キャンペーンや体験後の特典を通じて、短期的施策への参加者、すなわち有機野菜の購入者やYAPへの参加者を、中期的施策である農業体験プログラムの参加へと誘導する。また、逆に農業体験プログラムに参加して農業に興味を持った人は、短期的施策への関心も持ちやすく、新たな顧客となる可能性が高い。これらは養父市への再訪を促し、そこで新たな体験を得るだろう。具体的には、農業体験プログラム参加者を対象にSNS投稿キャンペーンを実施し、投稿者には次回体験のためのクーポンや割引を提供する。加えて、YAPなどの地域イベントや農家レストランにおいてプログラム参加者限定の割引や優待を実施し、養父市との継続的な関わりを促進する。

このように、段階的なインセンティブを通じて、まず養父市を知り、その後、実際に現地で何らかの体験をし、さらに地域と関わり続けるという流れを構築することで、養父市との長期的な関係を築くことを目指す。

#### ②認知度向上と経済拡大のつながり

第2は、YAVUの短期的施策を通じた「認知と消費の拡大」と中期施策を通じた「交流による定着」を組み合わせることによる、養父市の持続的な農業振興と経済発展の実現である。

具体的には、短期的施策では、ECサイトやYAP、農家レストラン等でのPRを通して「養父市＝有機野菜」というイメージを浸透させ、養父市の農産物や農家の魅力を広く発信することで認知度の向上を図る。それにより、養父産農産物への消費意欲を高め、地域経済の活性化につなげることを目指す。さらに、こうした取り組みを通じて養父市や農業に関心を持った人々が、中期的施策の農業体験プログラムへ参加する流れを生み出され、さらにこのことが地域の人たちとの交流をもたらす。このように、滞在型の体験や地域住民との交流を通じて、短期短期的施策で得られた養父市への認知や経済効果を一時的なものにせず、地域全体の持続的な成長へとつなげる。

### 4. おわりに——YAVUが目指す長期的効果——

以上のように、YAVUによって短期および中期の施策がそれぞれつながり、それらが継続的に実施されていくことで、「関係人口の増加が定住・移住・地域の事業参画など次のステップへ波及し、養父市が中山間地帯として魅力・活力を持ち続ける『選ばれる』地域になること」が実現すると考える。最後に、そのことが将来の養父市に及ぼす長期的な効果について具体的に説明して、結論に代えたい。

まず、養父市において長期的に期待されるのは、人口減少と高齢化が進む中でも地域の担い手が多層的に確保されることである。ここでいう「担い手」とは、従来の専業農家に限定されるものではなく、都市部からの移住者や、リモートワークを活用しながら農作業や地域活動に部分的に参加する人、季節ごとに農業に従事する短期滞在者、さらには学生の長期インターンや企業の

地域協力人材など、多様な関わり方を持つ人々を含む。このような「多様な関係参加者」が増えること(=関係人口の増加)で、農業労働力の補完だけでなく、地域イベントの企画運営や教育プログラムの支援、観光や飲食事業との連携など、地域の様々な場面に人的資源が行き届くようになる。

また、本報告で推進する有機農業を軸としたブランド化と体験型施策により、養父市の農産物の市場での付加価値が高まり、観光分野等との連携も強化される。その結果、地域における雇用機会や新規事業の可能性が拡大し、農業だけでなく加工品開発、農家レストラン、エコツーリズム、教育連携プログラムなど、多様な産業が育ちやすい環境が形成される。このように、地域資源と外部人材の循環が成立することで、経済活動が地域内で回り、人口減少社会の中でも持続可能な地域構造が形成される。

さらに、都市部住民や若い世代が持続的に養父市と関わることは、地域文化の継承やコミュニティの活性化にも寄与する。外部からの視点や知識が地元住民と交わることで、新しい価値観やアイデアが生まれ、変化に適応する柔軟な地域社会が育まれる。こうした外部とのつながりが定着することで、養父市の閉鎖的な地域ではなく外に開かれた学びと挑戦の場としての魅力が増し、次世代を担う人々が自然と集まる環境が形成される。

以上が、われわれが YAVU を通じて長期的に目指す「持続可能な中山間地域モデル」であり、将来にわたって「選ばれる地域」養父市の姿である。

#### 参考資料

- ・たじま UI ターン情報サイト：ひょうご北部で暮らす「初開催！就農希望者向け農作業体験イベント【11/24(日)養父・12/8(日)朝来】」〈<https://tajimalife.jp/event/5351.html>〉
  - ・地方創生 HP「養父市の挑戦 -地方創生」〈<https://www.chisou.go.jp>〉
  - ・農林水産省「アサクラサンショウの生産拡大」〈[https://www.maff.go.jp/j/seisan/gizyutu/hukyu/h\\_zirei/r5/pdf/28-2.pdf](https://www.maff.go.jp/j/seisan/gizyutu/hukyu/h_zirei/r5/pdf/28-2.pdf)〉
  - ・マイナビ農業「兵庫県養父市に広がる高原で野菜づくり。特産品『轟（とどろき）大根』の魅力！」〈[https://agri.mynavi.jp/2019\\_06\\_12\\_70741/](https://agri.mynavi.jp/2019_06_12_70741/)〉
  - ・やぶ市観光協会「朝倉山椒」〈<https://www.yabu-kankou.jp/sansyo>〉
- \*上記 URL はいずれも 2025 年 10 月 29 日に確認した。